『東方』二九六号より

中国女性史最新の情報

小野 和子（京都橘大学名誉教授）

私は一九七〇年代に奈良女子大学で、「近代中国女性史」をテーマにして二年間、講義をしたことがある。当時は、陳東原『中国婦女生活史』（一九二八）のほかにまとまった参考書もない時代で、とにかく関連する研究を求めて雑誌を繰り、漢籍や新聞の見出しを探しながら、断片的な史料を読み、一回一回の講義を組み立てていかなければならなかった。時々、どうにもまとまりがつかなくて、明日の講義は休講にしようか、と思ったことがある。

以来三〇年、今回、本書のような良き入門書を得て、中国女性史について、こんなにも多彩な分野がひろがり、研究業績が蓄積されつつあることに、うれしい驚きを感じるとともに隔世の感を禁じ得なかった。

そもそも中国では、一九四九年の革命によって女性問題は基本的に解決された、というのが、過去の支配的な考え方であって、革命史と区別して女性史を書く必要はほとんど考えられてこなかった。この状況を大きく変えたのが、八〇年代の改革と開放であった。李小江のような中国に足場をおきつつフェミニズムを追求する学者が現れ、或いはフェミニズムの世界的潮流の影響が及んで新しい理論構成が始まるとともに、さまざまな史料の発掘が行われるようになり、聞き書（オーラル・ヒストリー）なども行われるようになった。今日では中華全国婦女連合会が女性学の研究所をもつばかりでなく、主な大学には女性研究センターが付置され、さまざまな分野からのアプローチが行われている。聞き書をもとに「本地人」でなければとてもできない、という研究に出会うことも少なくない。またこの間、日本でもジェンダーの視点を取り入れたいくつかの研究書や研究論文が出た。こうした状況のなかで、中国女性史研究に関する全体像を把握することは、専門の研究者でも決して容易ではない。改革と開放からすればほぼ四半世紀、女性史研究の今日を展望する本書のような書物が刊行されたのはまことに時宜を得たもの、というべきであろう。

関西女性史研究会は、この十年来、関西の若手・中堅研究者を中心にして精力的な活動を続けてこられた。『ジェンダーからみた中国の家と女』（東方書店、二〇〇四）はこの研究会の最初の成果であり、本書の刊行はこれに続く成果の発表である。さらに最近では「男らしさ・女らしさの作り方」をテーマに、宝塚歌劇と越劇の実演・実技付きのシンポジュウムが開催され、若い研究者たちのパワーと関

トップページにもどる

関西中国女性史研究会篇
『中国女性史入門——女たちの今と昔』
A5判・二二六頁・人文書院・二、三一〇円

心のありようを強く印象づけられた(神戸学院大学との共催)。

本書はその研究会メンバーを中心に執筆者は総勢三〇人を越える。個人ではとうていできない各分野をカバーした集体著作である。また研究案内では、邦文文献を中心に二〇〇五年までの文献が紹介され、現代については、インターネット上のホーム・ページまで紹介されている。中国のホーム・ページになかなかアクセスできないでいる私は、その点でも大いに感心させられた。

本書は、「女たちの今と昔」という副題が示すように、古代から現代までを対象としているが、前近代についていえば、「考古学から見た女性」、「旧中国の家庭教育」、「後宮制度」などそれほど多くなく、通史的に述べる場合も叙述は近・現代が中心になっている。これは女性史研究の今日的状況を反映するものでもあり、文献史料の少ない前近代の女性史をどのような方法で構築していくかは今後の女性史研究の課題であろう。

本書は八つの部門から成っていて、それぞれに編集担当者による簡明な研究の展望があり、その下に八ないし一一の小項目がある。原則として見開き二頁、さらにその部門に関連するやや個別的なテーマについてのコラムが付録されている。以下、簡単に内容を紹介しよう。

Ⅰ婚姻・生育

現代中国の結婚や離婚を中心に、ドメスティック・バイオレンス、旧中国の婚姻、少数民族の婚姻、一人っ子政策などを取り上げる。法制上の建前だけでなく、今日の社会問題が大きく取り上げられている点が特徴的だ。童養?の悲劇、現代の人身売買といったコラムもある。

トップページにもどる

Ⅱ教育

前近代については古来の女訓書、『列女伝』、家庭教育が、近代については女学校、男女共学、識字問題から、最近の女児の失学問題や女子学生事情までが取り上げられる。コラムには北京大学に入学した最初の女学生や現代の女子学生の生活などが詳細に記されている。

Ⅲ女性解放

この部門は、これまで女性史と同様な太平天国以後の解放運動史であるが、「慰安婦」問題や中国における女性学について項目が立てられている点が新しい。コラムには「慰安婦」の証言もあって日本における裁判の最新の結果も知ることができる。

Ⅳ労働

古代の男耕女織から始まっているが、重点はやはり現代の女性労働にある。とくに市場原理導入後おこった女性労働の周縁化や「女は家庭に帰れ」論争などの項目がある。現代中国については九〇年代以降の男女の賃金格差や労働条件などのデータを示す。

Ⅴ身体

この部門は女性にとってのもっともプライベイトな部分として日本では従来ほとんど研究されてこなかったが、最近、中国やアメリカでの研究が進んでいる。髪、化粧、衣服、美女、纏足、娯楽、スポーツ／レクリエーション、出産、セックス、セクシャル・マイノリティなど、性に関わるテーマを取り上げている点が目新しい。

Ⅵ文芸

女性文学自体は比較的研究の行われている領域であろうが、ここでも女性の身体や欲望をとり上げた新しい潮流が紹介されている。このほか湖南省で発見された女書、演

劇、女優など。コラムも「白毛女」や演劇人の養成、越劇などがあり、演劇への関心の高さを示す。科白のむつかしいこうした分野にまで研究者の関心が及んできたことに女性史研究の広がりと深みを感じる。

Ⅶ政治・ヒエラルキー

後宮制度や呂太后・則天武后・西太后など権力を握った女性、また近代では宋家の三姉妹、江青など近代の女性指導者を取り上げる。また悪女は男性中心の伝統的な価値観によって典型化されたもので、必ずしも実際を反映しない、とする。

Ⅷ信仰

女神や年中行事のなかでまつられる神々、仏教・道教・キリスト教・イスラム教を取り上げ女性の精神世界を考察し、併せて現代の信仰にも及ぶ。民間信仰は女性の精神世界と生活を知る上で大きな意味をもつであろう。

以上、各部門の大項目、小項目、それにコラムを加えれば全部で一一〇項目は優に越えるもので、さながら中国女性史小百科のおもむきがある。しかも事典の類とは違って、簡潔ななかにも読みやすいよう叙述に工夫があって、読み物としてもなかなか楽しい。図版は、五〇年代の新聞、漫画、或いは民間の年画など私たちが今まで目にすることのなかったものがたくさん収録されていてフレッシュである。離婚統計や家族計画、男女の賃金格差など、統計や図表も最新のもので、座右において気の赴くまま読んでみたり、学生とともに討論の材料にするのもよいだろう。

希望をいえば、女性の法的地位とその実際の運用を示すものとして法律・裁判、女性の生活空間としての家、家族制度についてはもう少し詳しい項目を立ててもよかったのではあるまいか。また工具書として『近代中国婦女史(日文・英文・中文)資料目録』(中央研究院近代史研究所、一九九五―九六)、『近百年中国婦女論著総目提要』(北方婦女児童出版社、一九九六)、『婦女詞典』(求実出版社、一九九〇)などを巻末に掲げておけば、今後の資料の検索に役立った、のではないかと思う。

トップページにもどる

それはともかく、このような入門書が出たことはほんとにうれしい。今まで中国女性史に関心をもつ学生がいても手引きになる書物が少なく、卒業論文を書くにも先行研究を探すのが一苦労だった。数年前、女性の化粧について卒業論文を書きたい、といわれて困ったことを思い出す。興味深いテーマになったかも知れないのに、結局彼女は別なテーマを選ばざるを得なかった。また中国については適当な翻訳書がないのも悩みの種で、レベルの高い専門書の翻訳があり、それらを手引きに卒論をまとめられる西洋史の学生をうらやましく思ったものだ。

それとともに本国における女性史研究が活発になった今日、外国史としての中国女性史を今後どのように展開できるのか、を考える必要も出てくるであろう。

二十一世紀、中国の「半分の」女性たちがどのような歴史を生き、現実にどのような問題に直面しているのかを理解することは、中国史の「半分」を蘇らせることになるばかりでなく、中国史に新たな視点をもって持ち込んで、これを検証することになるだろう。

このたび、このような入門書を得て、中国女性史に多くの人が関心をもち、また若い研究者がそのなかから育つことを期待してやまない。研究会の今後に大いに期待を寄せるものである。